

文系と理系、コース分け早い？ 早大政経学部長が問う

有料会員限定記事

聞き手・後藤太輔 聞き手・高重治香 2020年1月28日 18時00分

「学びたいことが学べない」。昨年8月、大学生の丹伊田杏花（にいだきょうか）さんが「論の芽」で提言した「文系と理系の壁」には多くの意見が寄せられました。多くの大学で文系と理系で試験科目が異なり、高校の早い段階でコース別に分かれます。果たしてそれでいいのでしょうか。

早稲田大学 政治経済学部長 川岸令和さん



川岸令和さん

早稲田大学政治経済学部は来年の入試から、数学を必須にします。また、日本語と英語の長文を正しく理解し、批判的視点をもって自らの考えを論理的に記述できるかを問う独自試験も実施。高校生活を通じた教室の内外での学びをふまえ、答えが一つではない問題に取り組んでもらい、理解力や論理的思考力の素養を問います。それによって、文理に分かれ、限られた科目の「入試対策」に終始するといった学び方への問題提起になればよいと考えています。

1962年生まれ。専門は憲法学。著書に「憲法 第4版」（共著）「立憲主義の政治経済学」（編著）など。

例えば、統計的手法での分析は、経済学ではもちろん、政治学でも必要となっています。こうした学問の進化にともない、先行していた経済学科・国際政治経済学科に加えて、今年度の入学者から政治学科の学生にも統計学を必修科目としました。いわゆる「私立文系コース」で数学の素養が全くないと授業の理解が困難となっていることも入試で数学を必須にした理由の一つです。必須とするのは大学入学共通テストの数学Ⅰ・Aだけですので、数学を得意としない受験生にとっても負担感は小さいと考えています。

地球温暖化や経済格差など、人類は、はっきりとした解決法があるかどうか分からない問題に直面しています。大学は本来、すぐに陳腐化してしまうような知識ではなく、課題に果敢に挑戦していくための知恵を身につけるところです。

ところが今の大学入試ではその素養や意欲は測れず、文系と理系の科目に分かれて細切れの知識を問うています。こうした試験ならば、基礎的な問題にとどめてもいいのではないのでしょうか。そうすれば受験対策に追われずにすみ、文系科目も理系科目も、幅広く学ぶ余裕もできるのではないかと思います。

受験生には、高校時代は、興味のある本を手にとったり、教室の外に出て様々な人々とかかわったりしながら、自分の視野を広げてもらいたいのです。

そのためには大学側が育成したい学生像を示し、大学で学ぶことへの関心や意欲などを見極める独自試験を課すことが必要だと考えました。社会が直面する様々な課題を意識しながら送った高校時代の経験が入試で生きるようになれば、各科目でどれほど点数が取れるかで進学先を選ぶことで引き起こされる入学後のミスマッチも減らせるでしょう。

これまで必須でなかった数学や、総合的な学びを評価する独自試験を行えば、受験者数は減るでしょう。しかし大学は、社会課題の解決に貢献できる人材を育てるため、必要なカリキュラム改革、入試改革をためらってははいけません。受験生やその保護者はもちろん、社会全体に理解してもらえよう努力するべきです。

政治経済学部の入試・カリキュラム改革が、日本の教育を変えるうえでどれほどの影響力があるのかはわかりません。ただ、この内容が、入試に合格するという短期的目標だけではなく、その先を見据えた高校教育のあり方を考えてもらうきっかけになればと願っています。

（聞き手・後藤太輔）

NPO法人NEWVERY理事 倉部史記さん



高大共創コーディネーターの倉部史記さん

所属しているNPOで4年前、文理分けについてアンケートをしました。回答のあった普通科高校の9割近くに、文理選択の制度がありました。うち8割強が1年生のうちに文理の選択を求めており、1割強は1学期までに決めさせていました。クラス分けが2年生からだとしても、先生の配置や教科書の発注の都合で1年生の早い時期に決めさせるケースは多いです。

1978年生まれ。私立大学職員、予備校研究員などを経て独立。著書に「ミスマッチをなくす進路指導」ほか。

生徒の可能性を狭めないためには、専門分化はできるだけ遅い方がいいはずですが、なぜこんなに早い時期に、一律にどちらかを選ばせるのでしょうか。

高校の先生は、大学のせいだといいます。「本来は学習指導要領の必修科目をすべてまじめに勉強した生徒が不利にならない入試が望ましい。しかし入試は文理で教科が分かれているので、コース分けせざるを得ない」と。一方の大学側は「文理分けなど古いが、高校が文理分けを前提に教育をしているのだから仕方ない」と言います。誰が何のためにやっているのかがよくわからないまま、議論だけが続いています。高大接続改革を進めるなかで、こうした問題も話し合われたはずなのですが、実際にはあまり変わるきざしがありません。

「受験対策、高校側の行動原理」

教育関係者に話を聞くと、高校での文理分けが顕著になったのは1979年の共通1次試験導入以降です。大学の序列化が進み、世間が進学実績で高校を比べるようになりました。受験対策が先生たちの行動原理になり、「受験に不必要な数学は切る」といったカリキュラムが作られるようになりました。

今や高校は、「卒業間際まで遊ばず勉強させるための装置」として大学入試に頼りきっています。受験で求められる科目以外にも幅広く学ばせることもできるはずですが、そんな余裕があるのは一部の伝統校だけです。

もし文理選択をしなくてはならないならば、情報をもっと生徒に与えてほしいと思います。

中には「数学が苦手だから文系」「英語が苦手だから理系」という理由だけで選んだり、「女子は文系」といったまわりの大人の先入観に従ったりするだけの生徒も少なくありません。しかしこうした選択は経済学でも数学が必要で、技術者も英語が必要な社会の実情とはずれがちです。進路指導は進学情報会社のセミナーや冊子頼りという高校も多いですが、もう少し充実させて欲しいものです。

文理に限らず、早々に進路を絞らせようという周りの大人の思惑を感じ、残念に思うことがあります。たとえば、高校時代に校外でさまざまな挑戦をすることは進路を選ぶ上での気づきにつながるはずなのに、受験の妨げとしてよく思わない先生も少なくないのです。

受験をゴールにしてその先を考えない進路選択の結果のミスマッチは、深刻です。数学が苦手な文系を選んだ学生が授業についていけず留年や中退をしたり、「やりたいことがないならとりあえず看護学部」と指導されたものの仕事になじめず退職したり、といった具合です。

この状況を変えるには、簡単にカリキュラムを動かさない高校と比べ、自由度の高い大学の側が動くべきだと思います。

「文系学部でも数学必要、説明を」

生き残りのため受験生を増やすのに必死な大学側は、生徒を「消費者」「お客様」として扱っています。そのため、文系学部でも数学は必要といった情報や、高い中退率の情報などは

伏せられがちです。

こうした情報を明らかにすれば、一時的に受験生が減るかもしれません。でも入学前のイメージとのギャップが縮まれば、「中退率が低い」ことが新たなアピール点になるのではないのでしょうか。

「たとえ入学できても、卒業できるとは限らない」という実態を知っていれば、保護者や子どもの意識も変わるはずです。何のために大学へ行くのか、自分に合った大学や学部はどこかと、より深く考えて進学してくれるのではないのでしょうか。

共通一次導入の頃はまだ大学に行く子は50%に満たず、経済的に恵まれた環境で育った人、自分で好きな学問を深められる人、将来のことを自分でどんどん考えていける人などが大学生になっていました。けれども今は6割が大学や短大に進学する時代で、大学の目的や学習内容も多様になりました。だからこそ、これまでとは違うやり方で、進学した後のことを踏まえて、進路をじっくり考えられる環境が必要だと思います。（聞き手・高重治香）

読者の反応

大学講師・中根美知代さん

毎年、入試で数学を選択しなかった学生が、「今からでも数学を勉強したい」と、私が教える数学系の科目を受講します。専門外の知識はよき市民となるために不可欠です。しかし、大学での提供には限界があります。

大学教員は専門の業績で採用や評価が決まります。専門外を真剣に学びたい気持ちに触れたり、教える意義を考えたりする余裕も機会もない教員が多数派ですから、様子がわからず、しかも評価されない一般教育への対処を後にまわすのは、やむをえないことでしょう。

そういう先生が受験生を選抜し、それに従って多くの合格者を出そうとするのが高校ですから、根本からの改革が求められます。

京都大学 学術出版会編集長・鈴木哲也さん

京都大学学術出版会は昨年夏から、専門外の専門書を読む会を開催しています。「公正とは？ 幸福とは？」といった、本質的な問いに向き合うリーダーが育たないと感じたからです。工学、薬学、経済などを専攻する学生9人と月2回、古代ローマ時代の倫理論集を読んでいます。

「いい大学の合格」が評価になると、合格に必要な科目だけを学ぶ高校も現れます。大学生

も、色々な社会的・制度的な事情から米国等と比べると週の履修科目数が多い上に、教育制度が縦割り、自分の裁量で広く学べなくなっています。教員は専門の学術雑誌での評価ばかりを気にしています。

そんな評価軸を見直すためにも、政治家、役人、メディアなど、学びのあり方を評価する側にこそ、文理の壁を越えた知を身につける場が必要です。

高校教員

文理選択をなくして、幅広く学ぶのは理想的ですが、すべての高校で実現させることは難しいでしょう。

高校生は、勉強、部活、おしゃべり、スマホ、睡眠に、とても忙しい毎日です。限られた時間の中で入試という関門を控える生徒に「理想的なカリキュラム」は組めません。ある程度学ぶ科目を特化したからこそ、より良い大学に入学できる、ということがあるからです。

大学入試改革は、「記述式問題」「外部試験による英語4技能」の導入を巡って混乱に陥りました。これらの力が必要だという考えは、間違えていないと思います。ですが、実際の運営に落とし込もうとしたときには、高いハードルがたくさんあるのです。

大学生

私は大学で、奉仕活動や企業との連携活動で多くの人と関わり、やりたいことに出会いましたが、続けられそうもありません。通う学部は、全員が管理栄養士の資格取得を目指します。資格試験の合格率を上げるためなのか、卒業条件が厳しく、授業を選ぶことも、欠席することもほとんどできません。そんな中でも自分なりに将来の道を探してきたつもりですが、時間がなく、他の挑戦を阻まれていると感じます。

高校で決めた職に就く人はどれほどいるのでしょうか。私は、文系か理系かを高校生のうちに選択するのは良いと思いますが、途中で考えが変わったら他の道へ進む選択ができる教育が必要だと考えます。



「論の芽」は、日々の出来事や話題のニュースで感じることを「論」に育て、様々な意見に耳を傾けながら考える欄です。今後もさまざまなテーマを採り上げます。ご意見はopinion@asahi.comへ。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

